

## メッセージアウトライン 創世記35:1～20「ベテルへの帰還」

ヤコブの娘ディナが辱めを受けたことに端を発する、ヤコブの息子たちの暴虐。彼らはシェケムの町の男たちを皆殺しにし、女、子どもや町の全財産を略奪した。息子たちによる恐ろしい悪がそこで行われたのである。それは子どもたちに対する、神を恐れ、神を愛し、そのみことばによって生きるという宗教教育の欠如、一夫多妻という家庭環境の複雑さ、人間の罪の性質、それらのもたらすものが最悪の形となって現れた一大事件であった。ヤコブはすでにその地の一部を買い、祭壇を築いて定住する意思があったようであるが、そこは神のみこころの場所ではなかった。神のみこころの場所は、ヤコブがかつてメソポタミアの叔父ラバンの所へ行く途中に神が彼に現れ、祝福の約束を与えてくださったベテルでなければならなかった。そもそも叔父ラバンのもとで二十年の長きにわたって労苦していた時に、彼に御使いを通して語りかけられたことばは「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、私に誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい」(創世記31:13)であった。それゆえ彼が帰って祭壇を築き、礼拝をすべき場所はスコテ(33:17)でもシェケム(33:18)でもなく、彼の信仰の原点とも言うべきベテルでなければならなかった。このベテルはシェケムから約30キロメートル南、エルサレムからは約20キロメートル北の地にある場所。シェケムでの息子たちの暴虐な行いの後、ヤコブが心を痛め、困惑し、その地域の住民から復讐を受け、根絶やしにされてしまうのではないかと恐れていた時に、神からの語りかけがあった。

[1]「神はヤコブに仰せられた。『立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい』」

息子たちの恐ろしい悪にもかかわらず、神はヤコブを見捨てるようなことはなさらず、彼の信仰の原点ともいうべき地ベテルへ上ることを命じられた。ベテルは山地にあった。[2-3]「それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。『あなたの方の中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。私たちは立って、ベテルへ上っていこう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でもにいてくださった神に、祭壇を築こう。』」

「異国の神々」とはヤコブが叔父ラバンのもとにいたときに加えられた者たちが、それぞれの偶像の神々を持ってきていたと考えられる。ヤコブの息子たちもその影響を受けていたのであろう。「身をきよめ、衣を着替える」とはそうすることによって自分が神によって新しくされたことを示す象徴的行為であり、当時の人々の間で広く行われていた儀式であった。そのようにしてヤコブはベテルへ上り、いつも彼とともにおられた神に祭壇を築くことを一族の者たちに伝えた。

[4] ヤコブのこの訴えに対して、彼らは異国の偶像の神々と耳につけていた耳輪を持って

きてヤコブに渡した。耳輪がここに含まれているのは、それがなにか異教の習慣と関りがあったからであろう。ヤコブはそれらをシェケムの近くにある榿の木の下に埋めた。私見であるが再び掘り出される可能性があるそのような状態よりも、それらを焼いて処分しまえばもっと良かったのではないか。

[5]「彼らが旅立つと、神からの恐怖が周りの町々に下ったので、だれもヤコブの息子たちの後を追わなかった」

ヤコブはシェケムで息子たちが起こした事件で周りの町々の住人から復讐されるのではないかとの恐れがあった。(34:30) しかし、神はそんなヤコブを守られ、かえって周りの町々に恐怖を与えられた。それで彼らは後を追わなかったのである。これは全く神の恩寵のわざである。ヤコブの子どもたちが良いことをしたから神が守ってくださったのではなく、事実はその正反対であるにもかかわらず、このような守りが与えられたところに神の選びに基づくはかり知れない恵みの御手を見るのである。

[6-7] そのようにして、ヤコブの一族はシェケムより約30キロメートル南にあったルズすなわちベテルに到着し、ヤコブはそこに祭壇を築き、そこは神が最初に彼に現れてくださった所であったので、その場所を「エル・ベテル」すなわち「ベテルの神」と呼んだ。

「ルズ」は旧名である。(28:19) ヤコブがここに祭壇を築いたのはもちろん1節にあるように神からの語りかけがあったからであるが、それはまた彼が父イサクのもとを離れてからの旅と、叔父ラバンの家での寄留生活の全行程において神が守り導いてくださったことの自覚と感謝を表すものであったであろう。

[8]「リベカの乳母デボラが死に、ベテルの下手にある榿の木の下に葬られた。それで、その木の名はアロン・バクテと呼ばれた」

ここで唐突にデボラの死が出てくる。デボラはヤコブの母リベカがメソポタミアのパダン・アラムから父イサクのもとへ嫁いできた時に、リベカの乳母として同行してきた女性であった。(24:59) それがこの時はベテルでヤコブと一緒に住んでおり、そこで死んでベテルの下手にある榿の木の下に葬られている。これはどうしてかといえば、ヤコブがメソポタミアから帰って来て、兄エサウと再会した後くらいに彼はまず単身でヘブロンにいた父イサクのもとへ会いに行ったのではないかということが考えられる。残念ながらその時すでに母のリベカは死んでおり、リベカの乳母デボラがヤコブの家族に加わることを願ったので、ヤコブはデボラを伴って戻って来て、デボラはその後ヤコブの一族と生活を共にしていたということが考えられる。彼女はリベカの乳母であったので、すでに百歳は軽く超えていたであろう。その年にもかかわらず彼女はヤコブの家でも大きな役割を果たしていたようで、そのことは彼女の葬りの場所が「アロン・バクテ」（嘆きの榿の木）と名づけられたことから察することができる。母リベカの死に目にも会えず、今、デボラも失ってヤコブは大きな悲しみに襲われたことであろう。

[9]「ヤコブがパダン・アラムから帰って来たとき、神は再び彼に現れ、彼を祝福された」これは異国の神々を取り除き、祭壇を築いたことへの神の応答としての現われであっ

た。「再び」とは最初パダン・アラムへ行く時にこのベテルで彼に現れてくださり、「わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしはあなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」との約束をしてくださったのが一回目で(28:11~16)、そして叔父ラバンのもとの長い労苦の後、この場所に帰って来たこの時に、再び以前と同様に現れてくださり、彼を新たに祝福してくださったのである。その祝福の内容は→10~12節

[10~12] 「…あなたの名はもうヤコブとは呼ばれない。イスラエルが、あなたの名となるからだ」(10)

このヤコブからイスラエルへの改名はすでにあのペヌエルでの神との格闘の後で命じられているが(32:28)、その再確認である。続いてアブラハムとイサクへの約束がヤコブに対しても与えられる。(11~12)

これは祝福の契約の更新である。神はここで「全能の神(エル・シャダイ)」と名乗られイスラエルが一つの国民くにたみとなり、そこから王たちが出てくること、そしてアブラハム、イサクに与えた土地を彼とその子孫にも与えることを約束された。「全能の神」とは神が全能のお方であり、必ずその約束を実現させるお方であるということを示している。神が約束されたことは必ずそのとおりになるのである。

[13] 「神は彼に語ったその場所で、彼を離れて上って行かれた」

このことによって彼は確かにこの約束が実現することを確信したであろう。神がアブラハムに現れた時にも同じ表現が使われている。→17:22 これはヤコブをアブラハムの契約の継承者として承認するという意味があると思われる。

[14] 「ヤコブは、神が自分に語られた場所に、柱を、石の柱を立て、その上に注ぎのぶどう酒を注ぎ、さらにその上に油を注いだ」

ヤコブはメソポタミアへ向かう旅で、このベテルで神が現れて彼を祝福してくださった時に同じことをしている。→28:18~19 石の柱は神の現われの記念であり、注ぎのぶどう酒は神へのささげ物、油を注いだのは、それを神のために聖め分かつ(聖別する)ためである。

[15] 「ヤコブは、神が自分と語られたその場所をベテルと名づけた」

彼はすでに28:19でベテルと命名しているが、それはヤコブ個人の胸の中でのことであり、すべての人がこの名を用いていたわけではない。ここではかつての命名の事実を一族に伝え、その理由を説明し、人々の共感のうちに公にもう一度新しく命名したのである。

[16] 「彼らはベテルから旅立った。エフラテに着くまでまだかなりの道のりがあるところで、ラケルは出産したが、難産であった」

ヤコブの一族はその後、ベテルを旅立って南のエフラテへと進んでいった。「エフラテ」とは「実り豊かな地」という意味で、今日のベツレヘムのこと。この地はベテルから約30キロメートル南、エルサレムからは約10キロメートル南の地。彼らが進むのは最

最終的にヤコブの父イサクのいるヘブロンであろうが、大家族で多くの家畜もいるため、ゆっくりと進んでいかなければならない。その途中の地がエフラテである。この時、彼の最愛の妻ラケルが産気づいて難産であった。今日と違って産婦人科もなく医療器具や薬もない。出産の時には母体に非常な危険が及んだと考えられる。すべての女性が健やかな安産で子を産むわけではないのである。

[17-18]「彼女が大変な難産で苦しんでいたとき、助産婦は彼女に、『恐れることはありません。今度も男のお子さんです』と告げた。彼女が死に臨み、たましいが離れ去ろうとしたとき、その子の名をベン・オニと呼んだ。しかし、その子の父はベニヤミンと名づけた」

ラケルはヨセフに続いてもう一人の男の子が与えられることを願っていた。(30:24) そのことは助産婦も知っており、事実男の子が与えられたので、彼女はラケルを励ますために17節のように言ったのであろう。しかし、ラケルはその子の命と引き換えに死のうとしていた。彼女は死の間際にその子の名を「ベン・オニ (私の苦しみの子)」と呼んだ。まさに死の苦しみの中で彼女は自分の産んだ子をそのように呼んだのである。しかし、その子の父ヤコブは彼を「ベニヤミン (右手の子)」と呼んだ。「右」は名誉、幸運、卓越性を表すことばである。→使徒7:56 ヤコブは母の死を代償として生まれたその子の誕生に積極的な意味を見出していたのでこのような名をつけたのであろう。

[19-20]「こうしてラケルは死んだ。彼女はエフラテ、すなわちベツレヘムへの道で葬られた。ヤコブは彼女の墓の上に石の柱を立てた。それはラケルの墓の石の柱として今日に至っている」

今日と違って死体を長く保存することなどできないので、彼女はエフラテ、今日のベツレヘムへの道の途中で葬られることになった。ヤコブは彼女の墓の上に石の柱を立てた。これはラケルの墓のしるしとなり、これはかなり大きな石の柱であったようで、後の時代にまで残るものであった。→Iサムエル10:2 最愛の妻ラケルを亡くしてしまったヤコブはどれほど深い悲しみであっただろうか。察して余りがある。メソポタミアのパダン・アラムの地で初めて彼女に会った時から、ラケルの存在は寄留者としてのヤコブの生活を象徴するものでさえあった。しかし、父イサクに会うこともなく彼女は死んでしまった。主は与え、主は取られるのであるが(ヨブ1:21)、ベテルで新たに祭壇を築き、アブラハム、イサクに与えられていた祝福の契約が更新されたこと、そしてそこを発ち、父イサクのもとへと向かう途中でのラケルの死と新たな男の子ベニヤミンの誕生。このようなことから一つの時代が終わって、また新たな時代が始まったような感を受ける。人は移ろい、時代は変わっても、神の祝福は変わることはない。人間は不完全で罪ある存在であり、ヤコブもさまざまな回り道をしたが、ついに一族全部が偶像を捨て身をきよめ、信仰の原点であるベテルに上り、そこに祭壇を築き、礼拝をし、主なる神に立ち返った時に再びヤコブに神が現れ、祝福の契約が更新され、与えられたのである。そしてこのヤコブの子孫を通して救い主イエス・キリストが来られるのである。

私たちも常に自分の生き方を顧みて、ヤコブのようにベテルに、すなわち神のもとに立ち返り、信仰を新たにする必要があるのではないか。私たちの人生もヤコブのように喜びもあれば、悲しみもやって来る。しかし、主なる神の救いの約束、祝福の約束は変わらない。どんな時でも信仰をもって神のもとに立ち返り、従い続けていく者となろう。